

# 第55回 九州中学校社会科教育研究大会（宮崎大会）歴史的分野報告

期 日 令和5年11月17日（金）

会 場 宮崎市民プラザ

## 1 研究主題

### 社会について考え続ける主体を育む社会科学習の創造

歴史的分野における特徴と課題 主題設定の理由

学習指導要領において、主体的に社会に参画しようとする生徒が少ないこと、現代社会と学んだ内容が結びつかないことなどが社会科学習の課題として挙げられている。そのため宮崎中社研では、「考え続ける」ことを、「現代社会の課題について歴史的分野の学習を通して得た見方・考え方を働かせて自分なりの考えや意見を持ちつつ、新たな情報の追加によっては自分の考えや意見を変化させる可能性を開くこと」と定義し、単元の学習を終えても、ニュースや新聞記事などを起点とし、その出来事に対する意見や考えを自分なりに考えることを通して再び社会について考えることを通して、再び社会について考えることができる生徒の育成を目指している。

## 2 研究授業について

(1) 授業者 宮崎市立住吉中学校 永徳智彦 先生

(2) 授業内容

・単元名：「8月15日の神話～私たちは8月15日をどう捉えるか～」

・本時の目標

○8月15日が終戦記念日であることについて、別の可能性を分析することを通して、自分の解釈を通して、自分の解釈をつくることができる。

○各自の解釈を検討、議論することを通して、自分からつくった解釈の再構成を行うことができるようになる。

【授業の流れ】

段階	学習内容及び学習活動	指導上の留意点
導入	1 「戦争が終わる」とは何かを一言でまとめる。 2 生徒の考えを共有する。 3 現在の「終戦記念日」がいつなのかを確認する。 4 1で答えた戦争の終わりに該当する出来事が複数あることを知る。 ・8月14日（ポツダム宣言受諾） ・8月15日（玉音放送） ・9月2日（降伏文書調印） 5 本時の課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 5px;">日本が8月14日や9月2日ではなく、8月15日を「終戦記念日」としたのは何故だろうか？</div>	○ 生徒の認識の確認をするため、思いついたことを書くように指示する。 ○ 認識の違いを気付かせるために、生徒の考えを共有する。  ○ 問いを生み出すために、1の「戦争が終わる」という生徒の認識と「終戦記念日」を8月15日に設定していることに対して、生徒に意見を聞く。
	展開	6 個人でそれぞれの日に設定する良い点と悪い点をまとめる。 7 班活動で班員の意見を共有する。 8 9の意見を参考にして、8月15日をどのような日として位置づけるのかを考える。 9 班活動でそれぞれの意見を共有し、その意見の妥当性を議論する。
終末	10 振り返りを行う。 学習課題に対する班の意見を全体で共有する。	

### (3) 授業研究会の様子

授業研究会では、主に以下の2点についての検討がなされた。

#### ①授業を行う前提知識

8月15日が今現在なぜ終戦記念日とされているのかをおさえることが、定義づけを行ううえで重要になるのではないかと、単元を貫く問いとして8月15日について考えるのであれば前時までにもう少し揺さぶるような活動を取り入れていてもよかったのではないかなど、本時の活動を行ううえでの前提知識をもう少し生徒に与えた方が、意思決定において有効だったのではないかという意見が出された。

#### ②地域や年代ごとの価値観の違い

終戦という言葉の定義は人によって異なり、その中でも長崎や広島、北海道、沖縄など地域や国によって大きく差があるため、そのあたりのことを調べ学習をさせるなどして、学習させてから本時の取り組みを行った方が、制との意見が深まったのではないかという意見が出された、

### (4)指導助言

指導助言者である宮崎大学教育学部の藤本将人准教授からは、学ばなければいけない歴史からの転換を目指すうえで、百人いれば百通りの考え方があるところにチャレンジしていくことが大切でその意味ではよい授業であった一方で知識をどの程度与えるか、評価をどのようにするかなどの点において検討の余地があるとの講評がなされた。

### (5)所感

「終戦記念日」は8月15日であることに疑いを向けさせようとする授業者の取り組みは挑戦的であり、生徒たちもその中で、多様な意見を出していた。8月15日を、そのまま「終戦記念日」ととらえる生徒もいれば、「多くの国民が敗戦を知った日」ととらえる生徒もいた。また、犠牲者の心情を考え「記念日」とすることへの疑問を投げかける生徒もいるなど、思考を深めることができている生徒もいた。一方で、本授業では生徒たちに8月15日をどのような日として位置付けるべきかという発問が行われていたが、宮崎中社研が掲げる「考え続ける主体を育む」ためには、8月15日の意味づけを行うことよりも、「戦争が終わる」とはどういうことなのかを考えた方が、より本質的な問いにつながるように感じた。

### 3 研究発表について

(1) 「よりよい社会を形成するための力を育む社会科学習」  
～社会的な見方・考え方を生かし、一人一人の主体性を高める授業の工夫～  
発表者：長崎県雲仙市立小浜中学校 生駒哲郎 先生

#### (i) 研究の内容

##### ・学習過程の工夫

○各時間の目標やまとめが書かれた単元カードを活用し、可視化することで、生徒が学習の見通しを立てられるようにする。

○生徒の主体的な学びを促す知識構成型ジグソー法の活用

○予習の時間を授業の最初に確保し、めあてに対する予想を書き込ませることで、基礎学力の定着と、見通しをもって授業に臨めるようにする。

##### ・研究の成果

○「単元を通した問い」と「本時の学習における問い」の二つを設定することで、生徒に対して何を考えればよいかを明確にすることができた。

○アンケートの結果において言語活動や小集団活動を意図的に設定することで、説明や発表をする力が高まっていると認識する生徒が増えた。

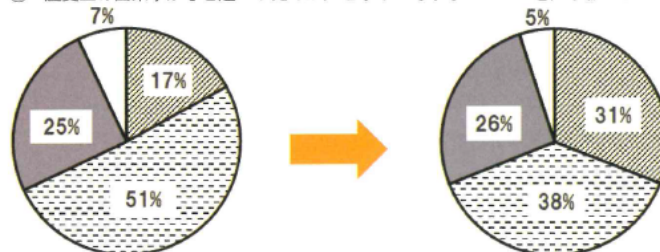
#### (ii) 所感

発表後の協議では、単元を通した問いや本時の問いが、どこから来たのかと言う質問がなされ、雲仙市で共通のカードを使っているという回答に対して、主体性を育むのであれば問いは生徒発信の問いになるよう工夫すべきではないかという意見が出された。本研究において成果としてあげられている、説明する力の高まりであるが、アンケート④の結果のように「大変そう思う」と回答した生徒が増えた一方で、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した生徒の割合に変化は見られず、歴史の学習や発表などの活動が苦手な生徒を惹きつけるような問いの設定や学習形態の工夫が必要であるように感じた。

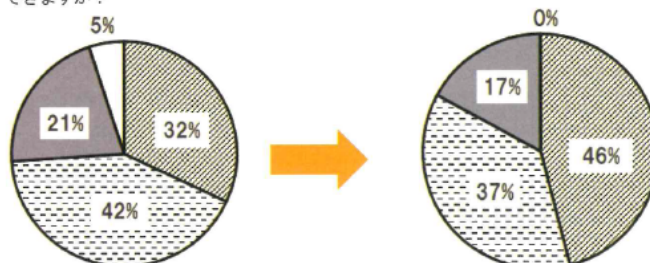
#### (1) アンケートの結果

■...大変そう思う ■...そう思う ■...あまりそう思わない □...そう思わない

④ 歴史上の出来事がなぜ起こったのか、どうしてそうなったのかを、学級や班のみんなに伝えることができますか？



⑤ 歴史で学んだことをもとに、様々な情報の中から自分が伝えたいことを探して、まとめや発表に利用することができますか？



(2) 「現代と世界史、地域と世界をつなげる授業開発」

～ロシア・ウクライナ問題とロシア軍対馬占領事件をてがかりにして～

発表者：鹿児島県鹿児島市立武岡中学校 山之内順也先生

(i) 研究の内容

・学習過程の工夫

○現代と世界をつなげる授業の展開

ロシアのウクライナ侵攻問題により、ロシアへの関心が高まっていることをうけ、世界史学習に力を入れることにより、世界各国の歴史や現代の世界の成り立ちについて理解し、国際関係の認識を深め、現代に発生している諸課題をとらえる力を育成する。

○地域と世界がつながる授業の展開

単元の学習を進める中で、ロシア軍艦が対馬を占領したポサドニック号事件や、漂流民としてロシアに渡り、世界初の露日辞典を編纂したゴンザとソウザを授業で扱うことにより、生徒の興味関心を深める。

○ロイロノートを活用した学習内容のデータベース化

思考の時間をできるだけ確保するために、ロイロノートを活用し、毎時間の資料をPDF化して板書内容とともに保存し、学習内容のデータベース化を行う。

・成果

○地球上のロシアの位置について理解と関心が深まるとともに、幕末にはペリーだけでなく、様々な欧米各国の脅威があったという知識についても深めることができた。

○データベース化を行うことで、座席位置による学習の弊害が軽減されたり、生徒だけでなく教師も振り返りを行ったりすることができるようになっている。今後はデータを前もって渡し反転授業を展開するなどの工夫を行っていきたい。

(ii) 所感

ロシアのウクライナ侵攻という生徒にとっても関心が高まっている現代社会の課題と歴史的事象をつなげることができるような工夫をしたり、地域の郷土資料を活用したりすることを通じて生徒の興味関心を高めようとする発表者の取り組みは、生徒の社会認識を高めることにつながると考える。一方で、発表者が課題としていたように、資料解釈や現代と過去の社会認識の違いを認識させることの難しさを感じた。誰よりも教員自身が、政治的中立性を確保しながら、史資料の解釈や伝え方を十分に吟味したうえで、活動を行う必要があるのではないだろうか。

(3) 「社会について考え続ける主体を育む社会科学学習の創造」

～正解のない社会的課題について考え続けるための「単元構成の工夫」および

「事後学習の設定」を通して～

発表者：宮崎県門川町立門川中学校 山之内順也先生

(i) 研究の内容

・学習過程の工夫

○単元構成の工夫

社会科では教科書の見開き1ページ分を1単位時間の中で授業することが多いが、そのように進めることによって、複数の見方・考え方が必要になるため、歴史的事象を取り扱う順番を工夫し、1単位時間の中で1つの見方・考え方を取り扱うことにより、知識の獲得及び活用が行いやすくなるようにする。

【図1】 主な歴史的事象から導ける「見方・考え方」と教科書の配置

教科書のページ	主な歴史的事象	導ける「見方・考え方」
P.264～265	軍隊解散、極東国際軍事裁判（東京裁判）	非軍事化
P.266～267	日本国憲法、教育基本法、財閥解体、労働組合法、労働基準法、農地改革	民主化
P.268～269	政党の新設や再建、メーデー	民主化
P.270～271	国際連合の結成	友好関係の強化
P.272～273	朝鮮特需	経済発展
	警察予備隊、自衛隊、日米安全保障条約、安保闘争 サンフランシスコ平和条約、日ソ共同宣言	自衛力の強化 友好関係の強化
P.274～275	原水爆禁止運動	戦争反対の呼びかけ
	アジア・アフリカ会議、東欧と西欧の関係改善、東南アジア諸国連合（ASEAN）	友好関係の強化
P.276～277	ベトナム戦争に対する反戦運動	戦争反対の呼びかけ
	非核三原則 日韓基本条約、日中共同声明、日中平和友好条約	非軍事化 友好関係の強化
P.278～279	高度経済成長	経済発展

（日本文教出版『中学社会 歴史的分野』（令和3年2月8日発行）を基に筆者作成）

【図2】 実際の授業で取り扱う歴史的事象と学習者が獲得する「見方・考え方」

時	取り扱う歴史的事象	獲得する「見方・考え方」
2	軍隊解散、極東国際軍事裁判（東京裁判）	非軍事化
3	日本国憲法、教育基本法、財閥解体、労働組合法、労働基準法、農地改革	民主化
4	朝鮮特需、高度経済成長	経済成長
5	警察予備隊、自衛隊、日米安全保障条約、安保闘争	自衛力の強化
6	サンフランシスコ平和条約、日ソ共同宣言、日韓基本条約、日中共同声明、日中平和友好条約、ヨーロッパ共同体（EC）、東南アジア諸国連合（ASEAN）、アジア・アフリカ会議、東欧と西欧の関係改善	友好関係の強化
	7	原水爆禁止条約、ベトナム戦争に対する反戦運動

○再開可能性を含めた事後学習の設定

今回の単元で取り上げた、戦争のない平和な世界の実現に向けて私たちはどうすればよいのかという問いに対して、意見を作り上げることは、容易ではないため、事後学習の場面を定期的に設定することを通じてテーマについて考え続ける力の育成を目指す。

→今回の単元では夏休みのレポートで、平和に関するニュースを取り上げ感想を書かせる活動を行っている

・成果

○見方・考え方を導きやすくするために学習内容の順番を組み替えたことにより、歴史的事象の内容を関連付けながら自分の意見を書くことができる生徒が7割程度いた。

○事後学習で行った平和学習のレポートにおいて、感想を書くだけでなく、本単元の学習課題であった、私たちはどうすればよいのかにまで踏み込んで記述できている生徒が一定数存在した。

(ii) 所感

発表後の協議では、評価の行い方や、レポートの意見をどのように活用することが有効かどうかなどのことが検討された。また、発表者は成果として、平和学習のレポートにおいて私たちがどうすればよいのかに踏み込んだ記述者がいたことを成果として掲げる一方で、そうした記述は全体の3割程度にとどまることを課題として挙げている。社会的事象を他人事ではなく自分事としてとらえ、学ぶ必然性を生徒たちにどのように伝えていくかさらなる工夫を行っていく必要があると感じた。

( 文責 歴史的分野副部長 深井 純 )